

【旭川東 北部九州総体 2024 全国大会優勝の軌跡】

【北海道旭川東高等学校山岳部顧問 飯田 一三】

1 はじめに

本校は1903(明治36)年に上川中学校を起源とする伝統校で、昨年創立120周年を迎えた。全日制と定時制普通科から構成され、全日制普通科は北海道有数の公立進学校である。

現在の全日制は6間口、約720名が在籍している。学校標語の「シマレガンバレ」や校訓「生をよろこべ 矩にしたがえ 全力をつくせ」のとおり、自由な校風が特徴である。文化系10、体育系10、外局4、同好会5と部活動も盛んである。過去の全国大会を紐解くと、1979年全国高等学校将棋選手権大会男子団体優勝、2002年全国高等学校クイズ選手権優勝、2012年NHK杯全国高校放送コンテスト優勝と輝かしい成績を残している。

2 山岳部の歴史

開校30周年史を見ると、明治40年に50名で旭岳に登るという記録があったので、おそらく開校した時に部、あるいは同好会としてスタートしているようである。明治44年に赴任した小泉秀夫氏は大雪山のフィールドワークを行い、「小泉岳」の由来となった人物である。登山の第1回全道大会は1962年、当番校は旭川東である。これは顧問の速水潔氏が強力なリーダーシップで始めたと言われている。彼はその後道内初の遭難救助民間組織を立ち上げたり、旭川山岳会会長を長年勤めた。全道大会は今年で64回を迎えたが、これまでに男子18回、女子20回優勝している。

3 道内初、創部以来初の全国制覇！

8月6日10:00、「ありがとうを強さに変えて 北部九州総体2024」をスローガンとした全国総体(インターハイ)第68回全国高等学校登山大会閉会式が福岡県そえだ公民館オークホールにて始まった。審査員長の長い(失礼)5日間の公表の後、いよいよ成績発表の時を迎える。発表は入賞6位から。昨年は北海道大会として地の利を生かし、優勝を目標としていたが、細かい失点が響き、男女とも12位と悔し涙だった。今年は失点が全くなく、入賞はできと思っていたが。

男子から発表。2位まで名前が呼ばれなかった。あー、



当然地元が勝つのだろうか。1位だけ「優勝」のコール。最初の「ほ」で始まった校名は北海道しかない。私は両手で顔を覆い、ずっと涙が止まらなかった。涙の中で聞いた女子の成績。女子も準優勝。男女ともそろって1位・2位は過去3校しかない。こんな瞬間に立ち会えることができたのは奇跡。思ってもいなかった。会場も同じで「おー」という歓声が響いていたようだ。私は涙で耳に入っていなかった。賞状授与は6位まで賞状、3位までそれぞれ金・銀・銅メダルを一人一人授与。優勝校は男女それぞれトロフィー3つに楯1つ。去年までは早く終わらないかなあと、別室でもらえばいいのにと考えてみていたが、今年は感慨深く味わうことができた。全道では強豪でも全国では全く無名だった旭川東校。校長への電話連絡や北海道山岳連盟会長、昨年まで一緒に顧問していた先生への電話でも皆一同絶句していた。

全国で知り合った顧問と握手をたくさん交わし、空港へ。大きいトロフィーが入った大きい箱をカウンターに説明して何とか機内に入れてもらい、旭川空港では保護者の皆さんが大きい横断幕とともに出迎えていただいた。旭川支部の山岳部顧問による祝賀会、新聞社の取材、市長への表敬訪問、本校で行われた報告会・祝賀会など忙しい日々が続いた。

4 山岳部の特殊性

山岳部の顧問はブラック。登山口まで公共交通機関で行けるのはほとんどなく、顧問による送迎は多い。登る時は常に先頭。真っ先に歩いて安全性を確認する。だから生徒よりも体力がなければならない。天候の予測。不

測の事態への対応。最近山岳部顧問、登山ツアーガイドへの司法の厳罰化がなされている。全国的にも山岳部の数は減ってきている。しかし、数は減っても部員数が多くなっているのが現状。これはうれしい限り。でも顧問のなり手は少ない。高校や大学で山岳部に所属するなど経験者は当然多くないからだ。だから赴任してから若いからとか理由を付けて顧問を引き受ける方は多い。かくいう私も前任校で赴任する前に私の確認も全くしないで気づいたら顧問になっていた。外部講師の導入が推進されているが、私のように顧問になってからその魅力に取り付かれる、このパターンはある意味で大切なことだと感じている。前任校では6年間メイン顧問である竹中先生にさまざまなご指導をいただいた。北米の最高峰マッキンリー（デナリ）や南米の最高峰アコンカグアを登頂し、沢登りにクライミング、山スキー、魚釣りやたき火。山中泊の厳しさや楽しさ。山や自然への向き合い方も含めて私の人生の大きな転換期となった。

6年間、竹中先生に教えていただいた後、彼が転勤したため、メイン顧問となる。ずっと後ろを歩いていた私は、先頭へ。誰も歩いていない道を先導する。これはたまらない楽しさであった。しかし、残雪期や登山道が藪などで見えづらい時は辛い。弱音も吐けず苦しんだ数年間であった。ソロや大人との山行で自分自身の「山力（やまぢから）」を磨き、経験を積んだことが私の大きな財産となり、自信へと変わっていった。特に低山、里山へのソロ山行では学んだことが大きかった。道標となるピンクテープが登山者用なのか林業用なのか、地図上にあるのに林道が廃道化していたり、逆に地形図にない林道があったり。登山道がない山を地形図を片手にイメージ化して歩くことはまさに「山力」そのものだと思う。

5 審査基準

登山をどうやって審査して、順位を付けるのか、よく聞かれる。そもそも順位を付けず、自分のペースで歩き、自分なりに楽しむ。ある人は高山植物に、ある人は山中泊で美味しい食事やドリンクを楽しむ。それぞれ楽しみ方は千差万別。これが本来の登山のスタイルである。高体連に所属しているので審査をして順位を付けてはいるが、いつもこれでいいのかなあ、と思っている。審査は体力やテントの張り方、調理審査、ペーパーテストなど多岐にわたっており、ペーパーを除き減点法が基本となる。

1チーム4人。これは山で一人にアクシデントが発生

した場合、1人が付き添い、2人が救助要請をしに行くという最低の人数と言われている。大会の場合は個人戦ではなく団体戦となる。

体力・歩行技術は100点満点で50点と半分を占めている。どちらとも審査員が先回りして待ち構えており、通過する時に審査をする。体力はA～Cと判定し、息が荒いとか4人揃って歩いているかを見る。歩行技術は主に下りの足運びを中心に見ており、スリッパやリズムカルに歩いているかを見ている。いずれも「走る」と減点の対象となる。その他を簡単に書き留める。

・装備審査 登山に必要なものを持っているかどうかを審査する。事前に何を所持すべきか知らせている。

・幕営審査 4人で協力して張っているか、ペグや張り綱を適正に使用しているか

・炊事審査 火気を安全に使用できているかを中心に審査

・天気図 ラジオから聞いて作図

・計画書 山に行く時の計画書。住所や概念図・断面図などがしっかりと記載されているか

・ペーパーテスト 登る山のコース状況や登山の知識を問う。

・地点確認 当日の朝に地形図が渡され、コース上に置かれているチェックポイント旗がどこにあるかを地形図に記載する

・マナー 時間を守って行動しているか、消灯時間や就寝時間を守っているか、提出物の校名記名など適切に行われているかなどを審査

全て合わせて100点満点となる。近年、約15校ほど勝ち上がる全道大会ではレベルが上がり、体力点は5校ほどが満点を取るなど激戦が続いている。

今年の全国大会では

男子優勝 旭川東99.2 2位～4位まで99.0

女子優勝 長崎県北陽台99.9

準優勝 旭川東98.9

3位 盛岡第一98.8

4位 98.7 5・6位とも98.6

と0.1点刻みの激戦で旭川東が優勝、準優勝できたことはうれしさを乗り越えている。

6 全国優勝の勝因

北海道代表が全国大会で優勝したことはない。1993年までは登山は順位を付けるものではないという考えから優秀校という名称で複数の学校が受賞しており、北海



道勢も10校ほど受賞している。1994から現在の優勝校1校のスタイルとなり、北海道勢の最高位は2011年札幌北男子の5位であった。本州の暑さに勝てず、審査基準に戸惑う、これが勝てなかった大きな要因であった。

今年、優勝・準優勝できた理由を列挙する。

①昨年度の北海道インターハイ開催

北海道の顧問とOBほぼ全てがかり出されて開催された大会。5年ほど前から企画・準備を始め、直前の3年間、全道大会はプレ大会として全国大会のコースを使用した。それまで北海道という特殊な環境の中で独自の審査基準だった全道大会も全国基準に近づけて選手も審査に慣れていった。私も女子隊隊長となり、全国の役員や審査員と親交を深め、さまざまなことを学ぶことができた。旭川東の選手は北海道大会で優勝することを目標に努力したが、結果は男女とも12位とふるわず、普段は涙も見せなかった生徒も相当悔しかった大会であった。一昨年度は男子22位、女子24位からでは優勝は厳しい。悔しい思いは勝つ原動力となったはずである。私自身は4人×45都道府県代表=180人の責任者として本校の選手の指導することはほとんどできていなかった。ただ、こうした貴重な体験が今年に生かさせたことは間違いない。

②今年度の全道大会

1968年以來の男女アベック3連覇を成し遂げることができた。ただ、素直に喜べたわけではなかった。強いからこそ、「謙虚に、おごり高ぶることなかれ」なはずなのに、他校を威圧したり、歩いている最中でも関係のない話を延々と周りにも聞こえるように喋ったり、審査に対してもクレーム的な言動があったりと審査委員会でかなり言われた。

私はただ説教しても何も始まらず、むしろそれを好機と捉えてここまで言われたら全国で見返してやらないか、

と選手に話した。選手の目によりやく赤い炎が見えた瞬間だった。

③顧問体制

昨年まで地元北海道インターハイのために顧問も3人プラス外部講師を付けていただいたが、今年は元の体制に戻り、まず登山経験者顧問2人がはずれ、新しく経験のない顧問が加わった。生徒は登山技術として頼れる顧問は私一人となり、甘えられる環境がなくなったことは大きかった。また、私自身は部活に細部まで関われる環境になったことも付与した。

山に順位をつけるなんて、という思いは今でも考える。ただ、私が教えたこと、さまざまな経験が「山力」となり、その力を素直に出せば勝てるはずだ、その強さをそのまま他校に見せればいいでしょ、という考えで指導している。

7 普段の山行

夏休みが明け、同僚から「おめでとうございます」という言葉をたくさんいただき、ようやく優勝したことが実感することができた。その中で、「先生、全国優勝しちゃったら、この先目標がなくなるでしょ」と言われた。私の目標は全国制覇ではない。これまでもそうだしこれからそう。「山や自然の楽しさを味わわせる」「山を通して人として成長させる」これが私の目標。狭いテントで寝泊まり。クラス内ではあり得ない濃密な仲間ができる。だから、クラスで見せる表情とは違う部員が多い。自分の素顔を見せられるって本当に大切なことではないだろうか。

春 周辺の里山歩きが中心。福寿草やカタクリを愛でながら道なき道を歩く。フキノトウを取って皆で天ぷらにして食すのも一興。



高体連 地区、全道、全国とその度にその練習として山に行く。審査基準を考えながらの山行だが、山中泊の経験なども通して楽しさ、厳しさを味わう。



夏 山中泊が中心の3泊4日の夏合宿。これが1年間で最も重要な山行である。大雪、羅臼、日高などなどどたっぷりと山を堪能する。また、沢登りやたき火など山とは違う体験をするのも楽しい。

秋 秋合宿と称して比較的高い山を歩くことが多い。また、学年ごとに連れていくことで学年のチーム力を高めるのもこの季節である。室内ではクライミングを通して体幹強化や体の動かし方を学ぶ。

冬 スノーシューやスキーを使って歩く。葉が落ち、雪に覆われた地形は読図の勉強になる。雪をぶつけ合ったり、木を揺すって雪を落としたり、テントを立てて中で料理したりと満喫する。

今年度の山行を記録しておく。

4/2 神楽岳 13・14 台場2条1丁目バス停～近文駅
29 音江山新歓

5/3 石垣山 11・12 春合宿 芦別岳 18 姿見の池
19 旭岳 22～24 地区大会 旭岳

6/8・9 ㊦㊧㊨山 山中泊 25～28 全道大会 ニセ㊩羊蹄山

7/8～10 義経山・ニハツ山 7/29～8/6 全国大会
福岡県

8/10～12 夏合宿 大雪縦走 高原温泉～愛山溪温泉
21 オロエン川沢登り

24・25 選抜大会 美瑛岳

9/7・8 地区秋季大会 暑寒別岳 20～23 秋合宿 利尻・礼文

10/11～13 1年合宿 三段山・濃昼山道 25・26 納会 神居尻山

11/16 上川駅～中愛別駅 30 嵐山

12/24 深川ネイパル クライミング

(予定)

1/7・8 冬合宿 下川クライミング スノーシュー訓練

18 旭山スノーシュー訓練

2/1 上米飯山～岩山 スノーシュー訓練 15 沖里河山
スキー訓練

3/8 和寒山スキー訓練 29 東川ヤマメ釣り

8 最後に

同僚、道内の顧問の先生方、全国で知り合った役員や顧問には感謝しかない。最後まで頑張った選手、その保護者。そしていつも山に行って家にいない私を支えてくれた家族。ありがとう！



【2度の北海道全国大会①】

【北星学園女子高校 WV 部元顧問 山下 文孝】

登山を長く続けてきて、この頃思うことは「登山は超ローカルカルチャーだ」ということです。どういうことかという、一つの登山グループがあると、必ず、そのグループに独特の行動様式、習慣があるということです。それは、例えば、「非常食を持つ」とか「夏山なら合羽・ウールのセーターを持つ」とかの安全にかかわることではなく、何分歩いて何分休むかとか、歩くスピード、非常食や食事のメニューとその取り方、服装、テントの張り方、等々です。ということは、教員として登山を指導するときに、このことをよく理解して指導することが大切になってきます。すなわち、自分たちのやり方が普通で、理にかなっているとは限らないということです。その一方で、この自由さも登山の魅力のひとつだと気づいてほしいのです。安全に関することをきちんとやっただけで、それに反しないことについては、自分たちの事情に合わせて、どんどん工夫をしていけるということも、大きな楽しみとなるからです。

私が大学のワンゲルに入って初めてのテント泊登山の時のことですが、同じ1年のボーイスカウト出身の新人部員と一緒に山に行き、テントを張り始めた時のことでした。当時のテントは2本ポールの家形で頂稜の両端にポール受があり、それぞれにポールを刺し、そこから伸びる張り綱を張って立てる古い家形のテントで、先輩に言われるままに、ポール受にポールを刺してテントを立て始めると、その新人部員は「張り方が違う！まず、グランドシートをしわなく広げ、四隅をしっかり止めてから・・・」と言って譲らないのでした。多分、ボーイスカウトでそのように学んだのでしょう。結局、上級生が「いいんだ！いいんだ！ちゃんと張れば、それでいいんだ！」と言ってその場は収まりましたが、その新人部員は、そのあと活動には来なくなりました。なお、テントの張り方の多様性については、今のドーム型のテントでもいえることかもしれません。

さて、そんなことはともかくとして、高体連の話しましょう。実は、私は北海道で開催された2回の全国大会に、2回とも参加しているというちょっと珍しい（と私は思っている）人間なのです。

まず、その一回目のことです。私が高体連にデビューした年の1987年の夏に、第31回全国高等学校登山大会が羊蹄、ニセコ連峰で開かれ、その手伝いでこの大会に参加したのです。そこで、私はとんでもない役目を仰

せつかったのです。それは、何と「旗持」の監督兼サポートだったのです。その旗は長辺が優に1mを超える長方形の旗で、折りたたみの2m前後ほどの旗竿が別に付いたものだったと記憶しています。また、旗の種類はもう忘れてしまいましたが、日章旗ではなく、確か高体連旗だったと思います。言うまでもなく、登山道では扱ったりはしませんが、倶知安の町中や、羊蹄登山を終えて、幕営地の樺山小学校の校庭（今は樺山分校となり広い校庭はなくなっている）までの車道を歩いた時などの一般道で人目のあるところに行くときには、必ず旗を出して歩いていました。さらに、風が弱い時の頂上大休止でも出していたと思います。のんびりとした楽しい登山だったんですよ。考えてみれば、参加校数もそんなに多くはなく、この大会に勝っても世界大会が有るわけでもなく、学校を休んで山へ行けるんですから、楽しく登山をして、様々なカルチャーの違いを経験し、よいものを取り入れる機会だったんですね。なお、役員の泊地は前日が倶知安町内、1泊目が比羅夫、2泊目が湯元温泉（当時はいくつかの温泉旅館があった）、3泊目が岩内だったと記憶しており、手伝い教員は、比羅夫以外はすべていくつかの小さな温泉旅館などへの分宿で、理由は覚えていませんが、湯元温泉から岩内岳の麓までは車道を使ったような記憶があり、その時には旗は出さなかったと思います。ともかく、参加学校数もそんなに多くはなく、選手たちがどんな気持ちで歩いていたかはわかりませんが、採点のない者にとっては、のんびりとした楽しい登山だったことを覚えていて、ニセコ連峰に行くと、時々そのことが思い出されます。なお、この大会の参加者全員に配布された、紺色で大会名とそのロゴなどが入った布製の手提げ袋を、今でも登山靴入れとして私は使い続けています。

さらにこれ以降は、女子校の教員だったこともあって、女子は地区予選が無く希望すれば全道大会に出られたので、毎回のようにならぬ全道大会に参加していました。そして、その時は簡単な研修を受けて男子隊の体力行動の審査員をしばらくやり、その後は男子隊の隊長を何回か務めさせていただきました。この場合も自分でいろいろ工夫をして務めを果たしていました。例えば、体力行動の審査員を務めていた時には、初めのうちは先輩の審査員の先生たちがしているように、場所を何回か変えて、急登が終わるあたりなど差が出そうな所で物陰に隠れて待ち伏

せ審査をしていましたが、「これって、結局一瞬しか見ていないんじゃないか？」と思い、その後は隊に同行した帯同審査をなるべくするように変えました。なおこの方法は、何人かいる行動審査の人間全員がやってしまうと、隊の中がぐちゃぐちゃになり、また、選手たちも常に見られていて、気が休まる暇もなく山を楽しむというわけにはいなくなってしまう。さらに、男子隊の隊長をやっていた時も、初めは先輩の先生に習って、隊の先頭を歩いていましたが、途中から一校を先頭に出し、そのすぐ後ろに着くように改めました。この方が、各校がローテーションで先頭を経験でき、自分たちで山を登っている気分になれるだろうとの配慮と、隊のスピードをコントロールしやすいからです。

とにかく、大会登山で隊長などをやっていた時は、初めはどちらかという、審査をしやすいうちと気を使っていましたが、途中からは、自分や選手などの参加者全員が登山を楽しみ、他の学校の良い取り組みをどんどん吸収していってくれるような登山にあらためていくようにしていききました。

そして、この後かなりの年月が過ぎたころ、とんでもないことが起こってしまったのです。それは、2回目の全国大会にかかわることはもうないだろうと思っていたのですが、その2回目に来てしまい、そのお手伝いを賜ったのです。これはある意味仕方ないことかもしれませんが。というのは、最初の全国大会の時には、北海道にはもっといい山があるのに、羊蹄はいいとして、なぜニセコなんだと思っていて、それを一部の方たちに話してしまったからです。山に優劣を付ける意図は全くないのですが、私にとってのニセコはスキーの山で、それは大学時代のワンゲルの4回の冬合宿がすべてニセコだったからでしょう。そして、この2回目の全国大会は、旭川地区の細野先生を中心にした先生方のとんでもない頑張り、何と、北海道の屋根であり屋台骨でもある、北海道最高峰の旭岳を含む表大雪と、それに連なる十勝連峰で開かれることになったのです。このうち、特に表大雪は自然保護の観点から見ると、大変貴重な植生等を含む特別保護区内がほとんどで、かつ、大会に使うコースのほぼすべてが、この特別保護区に入っていて、さらに、総勢 500 人前後の人間が参加しているというすごい大会で、普通だったら、自然保護の観点から入山許可が出なくても文句は言えないだろうぐらいの大会だったからです。このことは、他の都府県で考えてみると、山梨、静岡なら富士山で、北関東なら尾瀬でやるようなもので、普通ではありえないコース設定だと言えます。大会を現に導いてくれた、旭川地区の先生達をはじめ、大雪山

国立公園管理事務所の方々、さらには、登山中の安全要員として同道してくれた自衛隊員の方々など、すべての、関係をし、助力をいただいた方々への深い感謝の念を忘れてはならない大会だったと、時間がたった今でも思っています。

さらに、コース取りも素晴らしいものでした。十勝連山縦走、黒岳から裾合平を経て旭岳ロープウェイ駅へ、そして極めは旭岳往復と、どんなガイド付き登山にも負けない、いやむしろ、普通ならなしえないメインルートオンパレードのコース取りで、登山初日の十勝連峰へのバスでの往復、2日目の黒岳までの行き2つの長いバス乗車時間を吹き飛ばしてくれた山域コース選択だったのです。多分、このような、開催都道府県のメイン登山ルート網羅の大会は今まで見たこともないし、これからのないでしょう。これは、ある意味で、その地区の教員のレベルの高さをも表しているともいえ、さらには地元「やるんなら最高の大会を」との協力体制のあらわれだと、今でも思っています。その道を見事に切り開いた旭川地区の登山関係の先生たちの熱意には、ただただ頭が下がる思いです。そうになると、私には全く関係がなくなっていると思いますが、「この次はどうなるんだ？」との心配がころをよぎってしまいます。ともかく、この大会は、歴史に残る素晴らしい大会だったと言えるでしょう。改めて、もう一度「当時の旭川地区の先生方、全道専門部の皆さん、ご苦勞様」と言いたい大会でした。え？「何で自衛隊が？」それは、山と一緒に入ってみるとわかりますよ。強靱な鍛え上げられた肉体と、特に医療関係の装備を十分すぎるほど用意し、加えて、人員も多めに来てくれて、何よりも安心だったのは、体調不良やけがをした選手等をいとも簡単に応急措置、運搬、ヘリ輸送等をやってくれるんですから。ともかく、こうして本道開催の2回目の全国大会は無事に終わり、高体連登山での私の役割も一つのけりが付いたのです。改めて、全道、全国の大会のみならず、地区大会などを運営いただいた皆さん、ご苦勞様でした、と言いたいですね。さらに、こんな素直さのない私をいつも誘ってくれた先生方には、心からお礼申し上げたいですね。そして最後に、どこかの山でお会いできた時は、忘れず声を掛けてください。まだまだ、山をほつつき歩いていますから……！

【私の学校が全国大会②に行った話】

【北星学園女子高校 WV 部元顧問 山下 文孝】

私が大学院に在籍していたある日、所属していた研究室に北星から突然電話がかかってきたのです。電話の主は、同じ研究室に所属していた先輩でした。この方はクリスチャンで教員免許を持っていたので修士課程修了後に、北星で教員として勤めていたのです。電話の内容は、生徒が来すぎて教師が足りなくなったので、手伝いに来てほしいというものでした。その時、私は教員免許を持っていなかったのに、それを理由に断ったのですが、かなり深刻な状況だったらしく、臨免の申請は北星の方でやるのでぜひ頼む、という内容でした。私の方は、研究の進み具合は順調で、学位取得の目途も立っていたので、詳しく状況を聴き、かなり大変な状況だったので引き受けることにしました。そして、北星の理科に行って、びっくりしたことが起こったのです。それは、理科の先生の中に北大山岳部 OB の先生がおられて、授業の合間などにその先生と山の話をよくするようになったのです。言い方は悪いのですが、その先生は、その話の内容から私の山の實力を値踏みしていたのかもしれませんが、ある日の雑談の中で、「教員 1 人では大変で、特に何かあった時には対応しきれないので、ぜひ、山岳部の活動を手伝ってほしい。むろん、その時は学校から交通費などは出す」と言われたので、喜んでご一緒します、と答えました。その結果、高体連の大会などにも、引率教員の 1 人として参加させてもらうようになったのです。その頃の北星は、世間より一歩先を行っていて、世間に先駆けて 5 日制になっていました。それは、北星がキリスト教主義の学校だったからです。と言われても普通の人にはわからないと思いますので、ちょっと道をそれて説明します。クリスチャンの人々は、実は、日曜日の午前中には自分の属している教会に行って日曜礼拝に参加しているので、きっちり 1 日休めるようにするため北星では、欧米に習って、土曜を完全休日になっている、というわけです。さらに、そのキリスト教主義を完全なものとするため、日曜の午前中は学校も完全閉鎖で登校できないようになっています。ここで、にっこりなのが部活動の先生です。土曜は丸 1 日、日曜は午後からですが練習ができるのです。そして、山岳部も金曜の夕方から山に出かけ登山口で一泊し、土曜の早朝から登山をして帰れし、日曜日はゆっくり休む、というライフスタイルを取ることができていたのです。なお、登山をなるべく日帰りにせず金曜に 1 泊して山に連れて行っていたのには訳があ

るのです。夏山などに行く合宿などで素早くテントを張れるようになる、大会の練習になる、土曜に早朝から行動でき大きい山にも行ける、そして、日曜は 1 日自由になる、などの理由からです。

さらに、北星では、夏休みに入ってすぐ 5 日間の夏休み進学講習が有って、先生は講師を務め、それに山岳部の生徒を参加させ、夏山はその講習が終わった 7 月 30 日か 31 日ぐらいから『夏合宿』と称して山中 3 泊程度の登山を大雪などの大きい山で縦走形式でやっていました。また、冬には正月明けにニセコ五色温泉でこれも 3 泊程度の冬合宿もして山スキーもさせていたのです。

このようにして北星での教員生活では、登山生活もできていたのですが、その間、同じ学年の生徒が 4 人そろって入部してくることはまずなく、せいぜい 2~3 人ぐらいだったこと、そしてこれが最も大きな要因でしょう。教員が最も山を楽しんでいて、生徒達には山の基本まではきっちり学ばせていましたが、山を楽しむように言っていて、それ以上のことはあまり求めてはいなかったのです。その結果、毎年参加していた全道大会では上位に入る事は有っても、勝てることはなかったのです。ところが、ある年、とても優秀な生徒が 4 人そろって入部してきたのです。多分、西先生の影響をかなり受けていて、慕っていたのでしょう。その 4 人は皆、覚えも早く、体力、知力がみるみるついて行き、3 年になってすぐ、西先生と一緒にこの生徒たちを捕まえて質問をしたのです。それは「お前たち、全国大会に行ってみたいか？」と。すると「行きたいです」との返事が有ったので、「大会は 8 月で、その間、勉強の手を抜くことは許されない一方で、山の行き方はちょっと厳しくなるぞ！」というと、当然という顔をして「はい！」と答えたので、「山に行く回数も増えるし、行く山も体力を付けるために適した山になるぞ」とさらに付け加えると、また、当然という顔で「はい！」という返事をしてくれたのです。そして、その結果が、暑寒別であった全道大会で、見事な成績として現れ、何と、本当に全国大会出場権を勝ち取ってくれたのです。なお、この大会のメインコースは暑寒別岳で、女子隊はだらだらと結構長い登りが続く、北から直接頂上に上がるコースで、男子隊は南暑寒經由で暑寒に上がるコースだったので、女子隊が先に頂上に着いて、私は、もう忘れてしまっただけで勘違いかもしれませんが、たしか男子隊の隊長か何かをしていて、女子隊に少し遅

れて頂上に登って行ったのです。そして、頂上直下まで来ると、そのすぐ上の岩場から、下の方に現れた私に向かって、北星の選手たちは立ち上がって、「先生！」と叫んで手を振ってくれたのです。その姿は全く疲れを見せない余裕しゃくしゃくの表情で、「本当に立派に成長してくれた」と感じさせてくれるとてもうれしい瞬間だったのです。そして、夜の専門委員会で成績一覧を見てびっくり！本当に勝ってしまったのです！！

全国大会は、上越国境の山々で、確か、越後湯沢集合でした。少し早めに入って下見をするように計画をしたのですが、初出場の学校が勝てるなんて思っていなかったし、顧問2人の参加は無いので、生徒達にはそのことを話し、私は下見登山までしか付き合わず、その後は西先生にすべてを任せ、久しぶりに名古屋の両親のもとに帰省したのです。その別れは、たぶん、お互いに、ちょっとホロッと来るものが在りました。また、その下見登山も、同じ山を歩いてもしようがないので、苗場山と平標山の下りだけは大会コースを通ったのですが、それ以外は、大会山域のちょっと北にあった、岩場での転落遭難が多発していた有名な谷川岳を中心にした山を縦走する「体力維持登山」とし、上越国境の山々を楽しんだのです。そして、越後湯沢に下山し、翌日の開会式まで私は出て、あとは西先生にすべて任せて、JRで東京まで行き、新幹線で名古屋に帰り、両親と久しぶりの再会を果たし、何泊かして名古屋空港発の千歳行きの飛行機で札幌に帰ったのです。長い旅でしたが、楽しい登山旅行でもありました。そして帰札してすぐ学校が始まり、参加生徒から大会の報告を受け、自分たちの登山にはない大会での奇妙な経験をたくさん話してくれました。さらにこの生徒たちは、切り替えが非常に早く、すぐに大学に行く準備に取り掛かったのです。こうなると、西先生もそうですが、もうほって置けないので、勉強を含めて手助けをしたり励ましたりして、結局4人とも超名門といわれる大学に進学していきました。多分ですが、彼女達はもともと高い力を持っていたのでしょう。これに加わったのが、ワングルの活動を通じて、何でも自分でやっていくこと、苦しくても今やっていることをやりぬくこと、友人の大切さなどを学んでくれたのでしょう、と教員の勝手な思いを巡らす、楽しい思い出を残してくれたのです。

【富良野工業高校山岳部】

【北海道高体連登山専門部 OB 高井 勝巳】

初めに

手元に先輩から送ってもらった札幌西高校の登山部報があります。坂本直行氏が高校生の時代のものであり、100%の自主自立の高校生のみによる活動で圧倒されます。文章も格調高く、今と比べるべくもありませんが、高校山岳部創設はこのようだと思います。

1. 私と登山

横浜市出身の私は北海道の自然に憧れ、北海道の山に登ろうと大学を北海道で過ごし、ワンダーフォーゲル部に所属して北海道の登山を満喫しました。夏は当時まだあった日高山脈の未踏の直登沢をもとめて、冬は日高、大雪、知床の原始性豊かな真っ白い世界で過ごしました。大学卒業後も仲間と一から準備を始め、ヒマラヤの処女峰に遠征をしてさらに登山の楽しさ、奥深さを学びました。



インドヒマラヤZ1峰

もとより高校の教師を目指していましたが、高校理科の教師の採用の無い年代にぶつかり、中学校勤務のスタートになりました。数年後に任用替えがかない、富良野工業高校に勤務することになりました。

幸いなことに、前任者の異動希望もあってすんなり山岳部の顧問に就くことができました。

2. 高校登山にかかわって

富良野工業高校10年、旭川南高校4年、東川高校11年。中学校採用の私は高校に任用替え後、退職までの25年間を高体連山岳部とともに過ごせたことは、存外の有難いことでありました。その後再任用の五年間も

全道大会などで関わることができ、最後の年にインターハイ登山で全国の高校生と交流ができたことは、願ってもないことでした。

初めての高体連は驚くことばかりでした。バスを降りるや否や、リーダーの「気を付け」の号令で体育館の入り口まで颯爽行進する女子チームがありました。前年に全道優勝をしたチームだと後で聞きました。登山に行進とは何だと思いましたが、ペーパーテストや、順位をつけることなど、びっくりする内容ばかりでした。

当時の富良野工業高校の主の顧問と一緒に生徒引率をする私に「顧問が審査されます」と言ってニッカーホッカーを私に渡し、私はそれを履くことになりました。いまだにその真意は理解できませんが、教師の服装が生徒の採点に響くということなののでしょうか？

「えっ？」という驚きと、違和感から始まった高体連登山でしたが、その当時の北海道は男女とも全国のトップに位置していて、あたかも陸上部山班というような感がありました。大会の前には下見登山をするということで、生徒をのせて登山口まで出向きましたが、これまた驚き、同じ山に二度登ってどうするんだ？と思いました。以後、全道大会には沢登りを除いて、下見登山はすることはありませんでした。(地区大会は残雪の大雪山が多くどこも素晴らしいコースで、ショートスキーを楽しむ事も出来て何回でも行く楽しみがあります。)

先日のインターハイでも全国から下見登山が当たり前のようになっていて、富良野岳とかオプタテシケ山とか大会にない山へ行けばいいのにな、と密かに思っています。ちなみに国体などは、当時の富良野工業高校は同じコースを十数回行ってコースの暗記をしているようでした。その成果があって富良野工業高校はハマナス国体で見事に優勝をしました。

当時は違和感の大きな高体連登山でしたが、高体連登山は横に置いて、北海道の山の素晴らしさを子供たちに伝えたい思いで山岳部の子どもたちとの登山は始まりました。主の顧問は来年からは自由にやってくださいと言われていたので、二年目からは、自分主体の山岳部の活動ができるようになりました。

大学時代の、自由、挑戦を第一とした登山観のままに、私の体力がまだ続いていた富良野工業高校時代は、まさ

に大学山岳部の範疇に足を突っ込むくらいの登山を富良野工業の生徒たちと楽しむことができました。



カウナイ沢を行く

自分の学生時代は山に登ることそのものがトレーニングでありましたが、高校生はそこまで数はこなせません。富良野ワインハウス迄のランニング、北の峰登山で体づくりができました。練習試合（登山も高校の部活動上は練習試合と計算されました）は年間三回と規制がある中で、裏山に北の峰があったのは有難いことでした（北の峰は学校内の練習に数えてもらっていました。）

その後も練習登山の回数が頭を悩ますこととはなりました。いまの高校生登山に回数の規制などがあるので

しょうか？旭川東校など毎週登っているような気がしますが？不思議な感じがします。

3. 夏合宿 大雪山

私のいた時代の富良野工業高校山岳部の活動は、基本的には夏の沢登り、冬のスキー登山でありました。高体連の大会は付属として位置づけ、富良野工業高校山岳部の活動は夏合宿をメインにおいた三年間で、大雪山、知床連峰、日高山脈の山に登る、行動中に沢登りを入れたコースを歩くことにおいでしていました。ですから子どもたちには全道大会には行こう、でも全国には行くなよ、行けば北海道での夏合宿ができなくなると、冗談ととられそうな本音で話をしていました。

メインの合宿は例えば、カウナイ沢を遡行してトムラウシ山に至り、早稲田沢を下ってトムラウシ川地獄谷泊。再び稜線にトムラウシ川上流を遡るものでした。五色岳の頂上で地下足袋を履いている高校生に気が付いた登山者は（後でわかりましたが北大山スキー部のOBでしたが）、高校生が大雪山の沢登りをしているのに驚いていたようでしたが、しっかり準備をして細心の注意をすれば、大雪山の沢登りは、高校生に可能な登山です。この時は、3年生をインターハイ出場に送り出し、残った一年生7人のみの大雪山の合宿でしたが、夏を前に入部した何人かは初めての山がカウナイ沢という、中々あり得ない（少しやり過ぎ）山登りをしたと今では思っています。

早稲田沢の長い雪渓を下っていき、雪渓が切れて滝が口を開けている場所など、細心の注意を払って下ったことを覚えています。午前中に地獄谷について温泉を掘って入ったことはなかなかの思い出です。トムラウシ川からカウのお花畑に出る場面では横一列に藪をこいで同

トムラウシ川 地獄谷温泉にて



じ場所を踏まないように、先達から受け継いだ自然保護と登山の感覚を大事にしていました。カウン岳のへそに着いた時の子どもたちの、一回の山行きによる成長は言わずもがなのものがありました。

4. 知床合宿

富良野工業高校十年間の中では、結局知床合宿は一度しか出来なかったのですが、その年は全道大会が知床であり二年生と一年生しかいない年であったので、折角全員で準備をしたので、そのまま夏合宿を知床で行うということでスタートしました。

これも欲張った計画で、実は自分の学生時代に、知床には行きたいものの、日高の沢の魅力には勝てずに、頭のすみにのこっていたものでした。いくつかの手ごわい沢をのぞいて、知床の沢は基本的な行動ができれば登れる沢です。一年生で大雪山の沢を経験した二年生が揃えば、可能な山域ではありました。

羅臼側の沢をまずは一本、知西別川を登り羅臼湖へ出て、それを終えて宇登呂側に移動してイダシュベツ川を登り硫黄山へ、稜線を縦走して羅臼岳に至るというなかなかのものでした。

知西別川の河口にテントを張って快晴の中、日帰りの

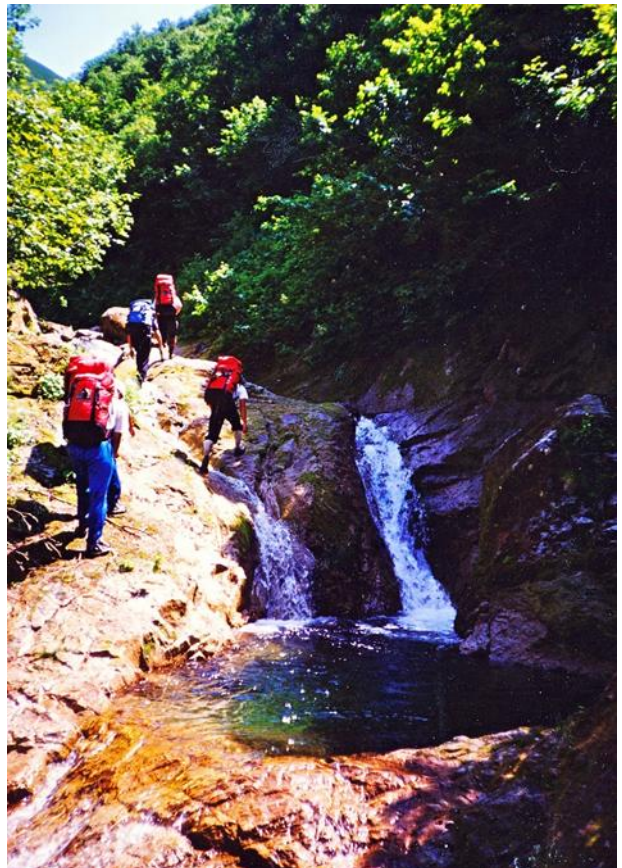


知西別川の滑を行く

装備で知西別川を遡行。源流の羅臼湖へ向かいました。明るく綺麗な沢で、高校生でも行けると聞いていた沢でしたが、なかなか迫力のあるスケールの大きい沢でした。滑床を歩き、大滝を高巻いて羅臼湖に出ました。予想以上に時間がかかり宇登呂側への移動を一日延ばし河口に二泊しましたが生徒一名が高巻きで手を負傷して、引率者三名のうちの一名と別行動で羅臼岳に登ることになりました。長い川では逃げる場所がなく、慎重なる行動が求められます。

メンバーは、イダシュベツ川の河口に一泊して全装備を背負って硫黄山に向かいました。全道大会で登った硫黄山の登山路の右側を流れる川です。

不思議なことにこの川に魚はいませんでした。いまだにその理由が分かりません。イダシュベツ川は二つの滝の高捲きがありますが、踏み後をしっかりたどれば問題はありません。巨岩の多い沢でした。ところどころに湧水があり、生徒は「熊出るなよ」と叫びながら川の源



イダシュベツ川の遡行

頭部に出ました。おそらくかつての火口であったろう場所は冷たい湧水もあり最高のキャンプサイトでした。

次の日、硫黄山を往復してサシルイ、オッカバケと越えて羅臼平にキャンプ。沢を二本こなした体は飛ぶように縦走路を楽しみました。

羅臼岳の眺望を楽しみ、仲間の待つ木下小屋へと下山しましたが、くれぐれもメンバーの揃うこと、万全の態勢がなければできない厳しい合宿だと思われます。

5. 日高合宿

十年間の富良野工業高校山岳部で、日高の夏合宿は二回、いずれも幌尻岳に沢から登りました。糠平川の登山道から幌尻山荘へ。今では百名山ブームで、何か月前

から予約しないと泊まれない小屋になっているとは隔世の感があります。当時は登りも下りも、小屋に泊まって英気を養っていました。

小屋を出て糠平川の本流から北カールを目指しました。大きな滝を二つ高巻いて、小滝をぐんぐん上ってカールボーデンへ。カールの中を流れる川は、本当にこれ以上ないような雰囲気です。踏み後を辿って幌尻岳の頂上へ。そこから七ツ沼カールに下って夢のキャンプをしました。



額平川を登る

七ツ沼のキャンプは、学生時代から、20年振りでしたが時間が止まったようでした。百名山ブームの今も、ここまで来る人はいないようです。いつまでも静かな時間が流れてほしいと願います。

下りは、トツタベツを越えて、北トツタベツの頂上から糠平川6ノ沢を下りましたが、深く切れ込んだ谷筋が開けてくると順層の小滝が続きます。しばらくすれば二股の大滝が出現して右を大きく巻いて下りました。なかなかの沢下りです。事前にM教諭から聞いていた様相とはかなり違って、大滝の高巻きも中々でしたが、小さな1mの小滝が下れないのです。小尾根を乗越して小さなルンゼを合羽を着て水流の中に降りるといふ、荒業を強いられました。考えてみれば、この沢は橄欖岩の沢

で、まさにマントルが地表に押し上げている場所でした。いわゆる活断層に沿ってできた沢なのです。それゆえ、沢は毎年少しずつ動いていて、M教諭が行かれた時とは様相が変わっているのです。川は生きていることを思い知らされましたが、実はまさに地球のダイナミズムの中で山登りをしている訳です。

ザイル不要と言うことだったので細引きしか持参せず、持たないことを後悔しました。ザイルさえあればあの下れない小滝を難なく吊り降ろせたのにと思いました。ザイル一本は必ず忍ばせておくべきでした。



六の沢を登る（別の年次）

（この写真の滝付近に ↑ 橄欖岩の上昇による活断層があると思われます。）

天候のめぐりあわせや、メンバーの状態など多くの要素で行う合宿なので毎年、計画通りには行きませんが、それぞれの年代で夏合宿をメインに成果のある北海道らしい登山ができたと思います。普通は高体連で部活動は終了すると思いますが、富良野工業では、この後秋の合宿をもって各代の終了にしていました。

6. 五月の山のショートスキー

新入部員を迎えた四月から新しい年度の活動が始まりますが、富良野工業山岳部の登山の特徴の一つは残雪スキーです。使い古しのスキーを切断して1mくらいのショートスキーに変えて4月の連休から高体連の時期までスキー靴を背負って登りました。それぞれ十勝岳の頂上から、旭岳の頂上から、三峰山から、山靴をスキー靴に

履き替えて下りは大滑降を楽しみました。一般登山者の多い十勝の頂上で、おもむろにザックの中からスキー靴を出して、登山靴をスキー靴に変えて頂上から滑り出す高校生たちを、何と思ったでしょうか。今思っても、登山者たちの顔が浮かんできます。

最高だったのは十勝岳のもっとも最近の噴火によって、止まっていた白銀荘の温泉が復活して再び入れるようになった時のことです。スキーで滑っておりれば、旧白銀荘の前にブルーシートでできた簡易湯舟にお湯が張られていました。当時の管理人さんの佐藤さんの、「入っていけばいい」という言葉に五月の陽光のもと、スキーを終えた高校生と出来立ての湯の中で流した汗は最高でした。今では保養施設白銀荘になっていますが、あのブルーシートの湯にかなうものは無いですね。

退職した今でもこの時期はショートスキーを背負って十勝岳や旭岳に登ります。富良野岳や、オプタテシケの南側斜面を滑りたいと思いますが、登り返しが大変そうていまだに実行できていませんが。



十勝の頂上から（ショートスキーで）



ショートスキーを背負って（五月）

7. 冬山登山

冬も限られていましたが、一回に二、三人ずつの生徒と、シールを付けた冬山用のスキーで三段山、美瑛岳の西斜面などに出かけました。高校生の冬山は禁止だと言われて、三段山国設スキー場でスキー練習とか、(地図に三段山国設スキー場とありました)、3月は春山だとか言い訳を付けては出かけていました。

今でも不思議に思いますが、高校生が冬の出羽三山を縦走とか、当時の新聞にも在って、高校生の冬山禁止という大義は一体何なのだと、いい加減だなあと感じています。今ではスノーシューという道具が一般的になってきて、各校が冬の低山を歩く活動が増えたことは喜ばしいことだと思います。

山岳部とは別ですが、全員が富良野スキー場のシーズン券を持っていて、冬休み、春休みなどは、スキー場に集合してコブ斜面を滑りまくっていたのも、富良野っ子ならではの事だと思います。



厳冬の三段山

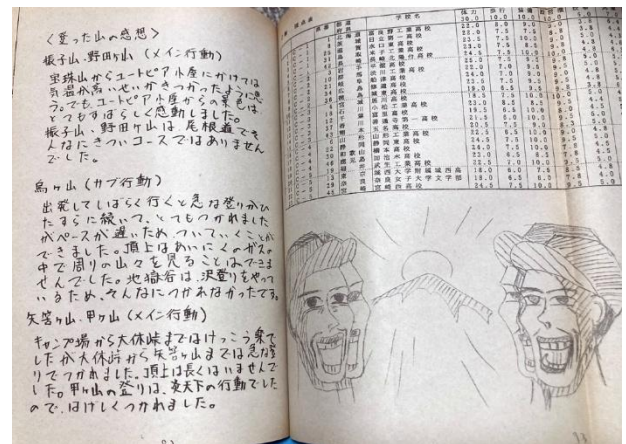
8. 十年間の登山部報

文字を書くことは自分の考えをまとめることになり、知らず知らずのうちに自分を見つめ直します。そういう意味で山が終わるたびに感想文(紀行文、反省文)を書き記録や写真と共にまとめて年間の部報を作成しました。部員が10人を超えていた時などは、厚さが2cmを越えることもありました。

登山はただの運動部ではないと思います。古から、営まれてきた人間と自然との関わりでもあります。自然と人間のかかわりを忘れて、文明が偏って発達してしまったものが、21世紀の人間社会だと思いますが、山に親しむ人間はそうであってはいけません。自然に対する畏敬の念を忘れてはいけません。謙虚に自分を見つめなければなりません。文章を書くことは自分を見つめることになると、

山に出かけるたびに、子どもたちに文章を書いてもらいました。自然の中でいかに人間が小さいか、喜びとともに覚えてくれればといいと、子どもらの成長の役に立っていればいいとの思いで続けました。

『我が家より見ゆる大雪山(たいせつ)稜線に風吹くを見れば若き日思ほゆ』



全国大会出場～富良野工業高校山岳部報より

9. 富工WALL

富良野工業高校は新しく富良野緑峰高校へと変わることが決まりました。もう建て直す校舎なのだからと、M教諭が学校長、事務長に問えば、安全面が確保できるならと言うことで了承をしてもらいました。

二階建ての7mの校舎の側面に人口壁を作ろうということなのでした。公務補のSさんの協力を得て、普段上らない屋上に登ってまずはしっかりとした支点を何か所か取りました。モルタルコンクリートの校舎にドリルで穴をあけることはなかなかなく、気持ちの良いものでありました。屋上に支点を取ってそこからザイルを垂らし、下降しながら、人口のホールド、スタンスを取り付けました。下半分は、足場を組んでホールドなどを付けました。これで完成です。

新しく緑峰高校になる前の三年間を大いに生徒たちと楽しみましたが、話はその後にも続いていきました。驚いたことに、校舎の建て替えになるときは旧校舎にあったものは残すというルールがあるのだそうで、新しい高校の目玉として、中庭に17mの人工壁ができました。この壁はそれ以後の高体連クライミング種目にあって正式な大会なども行われて、大いに後の生徒たちに利用されることとなりました。



手作りの富工 wall



新しき緑峰 wall

残念なことに、当時メンテナンスの費用を考えられなかったために、だんだんと使われなくなって、後に危険構造物となってしまったのは残念なことでした。

10. 今後の高体連

退職して十年以上たちました。新しい顧問の人たちが創意を凝らして生徒たちと登山を続けていると思います。中々自然と触れ合うことのない現代の高校生に、山という大きな自然に触れることによって、自分の小ささに気付く機会にしてほしい。人間と社会に目を向けて、いかに生きて行くかを感じ取ってほしいと願います。安全に下山するという知識を得て、成長してもらえればよいと思います。

創立した時の、高校山岳部のような、自主自立は今では求めるべくもないけれども、くれぐれも大会のための登山ではないことを生徒に伝えていただきたいと思います。

間違えて？出場したインターハイで、集合時間の一時間も前に 30℃にもなる日に軍手を付けて起立したまま出発を待っていた他校の生徒。聞いてみれば、減点はどこでされるかわからないのと、早く並び起立し続けることで、体力があることを印象付けるのです、と言います。行動中も昼食の時も決して座ることはないと言っていました。

別の学校は行動中に「〇〇高校ファイト」と、バレーボールみたいに掛け声をかけて、その後リタイアしていきました。何だったんだろう？

私が専門委員をしている時に、登山の大会の名称に「選手権」が付加されました。高体連なので仕方がないのですが、高校山岳部が高体連に参加したのは、高校生に安全登山を教えるためと聞いています。当時高校生の山岳遭難が続いていて、そのために参加したと聞いています。(登山で競うのは本質的ではないとの判断)

是非高校山岳部が高体連に参加した本来の意味を理解して、安全登山に心がけてほしいと思います。さらなる発展を祈っています。今後もどうぞご健登下さい。



富良野工業高校山岳部報



美瑛岳を背に



芦別岳ユーフレ沢地獄谷を登る（6月）

【山岳部と私】

【北海道高体連登山専門部 OB 桐尾 義之】

ここに30枚の小物入れ袋があります。毎年、秀岳荘が全道大会の記念品として提供してくださっているものです。昔、秀岳荘で買い物をしてサービスでもらったものをあわせると40枚ほどが私の遊び部屋の引き出しを占領しています。使い込んで文字がほとんど読み取れないものもありますが古い順に並べてみました。最も古いのは1988年の第27回ウペペサンケ・ニペソツ山の全道大会。遠軽高校で山岳部を立ち上げ、初めて北見北斗を破って参加した全道大会でした。その後30回大会からはすべての大会に引率や役員で参加しているので36枚+インターハイ1枚あるはずですが、失くしたり汚して捨てたりで7枚ほどが行方不明です。

並べてみるとどの大会も思い出深いものがあります。その中でも自分が当番校で運営した3回の大会は別格です。第33回と42回は北見北斗でいずれも山は知床硫黄山と羅臼岳でした。33回大会は2日とも晴天で全道の選手・顧問に知床の山を満喫していただきました。私もまだ大会に慣れない中で大会運営はハードでした。

42回大会も会場は同じ。知床が世界遺産になり、さらに昨今のヒグマ騒動の中ではもう大会で使うのは難しい山かもしれません。恒例になっている交流会は知床の大会から始まりました。さすがにウトロの野営場ではクマを呼ぶ恐れがあるとのことで港のイベント会場を観光協会から提供していただき実施しました。

50回大会は小樽桜陽でニセコの岩内岳・目国内岳と羊蹄でした。北見から転勤するとき潮陵高校が当番校の予定が異動のゴタゴタで回ってきました。3回も全道大会をやるとは思いませんでした。この年は残雪が多くニセコではコースが不明瞭で苦勞の多い大会でした。いずれの大会でも専門部の先生方、当番校の先生方はもちろん地元の山岳会やOB、山仲間などにご協力をいただき、また、天候にも恵まれ、なんとか無事に運営することができたのは幸いでした。

私が高校に入学してまもなく、友人に誘われて入部した山岳部(岩見沢東)で高体連の地区大会に参加しました。会場は夕張岳、今のヒュッテ前に幕営



したのを覚えています。当時の空知はまだ炭鉱が健在で美唄、岩見沢、夕張などから6、7校が出場していました。高校の3年間、芦別、ピンネシリ、札幌近郊の山々などを歩きました。高3の夏に友人と二人でクワウンナイを遡行し、二泊で高原温泉まで歩いたのが良い思い出です。

教員になり部活では遠軽、北見北斗、小樽桜陽の3校で顧問を務めました。遠軽高校は形だけあった同好会の顧問になりました。同好会では備品も買えず、遠征費もでないのではじめは町の山岳会からテントやコッフェルなどの用具を借りて山行を実施しました。その後、部員も増え部に昇格し、ゴールデンウィークの愛山溪やクワウンナイでの夏合宿などおもに大雪周辺をフィールドにして活動しました。武利岳や平山も近く、土曜授業が終わって午後から車をとばして白滝の平山にトレーニングに行ったりもしました。冬場はトレーニングでクロカンスキーを取り入れました。当時は歩くスキーブームで特に遠軽は国内最長の湧別原野クロカンスキー大会があり、生徒も半ば強制で出場しました。最長の原野コース 85 kmに出場した生徒も多くいました。若かったので生徒と一緒にガンガン活動するのが楽しくてたまりませんでした。当時は北見支部も7、8校に登山関係の部があり地区大会は知床や大雪、新人大会は天塩や武利武華、平山など素晴らしい山で実施されました。

10年務めた遠軽から北見北斗へ異動しました。幾度も全道優勝し、全国大会に出場した名門校でした。前庭の森の中に古いけれど立派な戸建ての部室があり、代々の部員の名札がかかっていました。北見には標高 829mの仁頃山があり山頂まで車道が通じています。登山道も数本整備され市民の山になっています。部活でもよくトレーニングに連れて行きました。標高差 550mほどを生徒と競い合っています。登り 40~50分ほど下りは 25~35分です。下りで走ったのが今になって膝にひびいています。夏ばかりでなく、冬休みには-20°Cの山頂で耐寒訓練と称してテント泊したり、プラスチックのソリで山頂から滑り降りたり、年中通いました。山行も充実していました。北見は阿寒、斜里、武利・武華など日帰りで楽しめ知床や大雪も近く、山に不自由しませんでした。生徒たちには「こんないい山に

たくさん登ってる高校生はいない！大会でも自信を持って登ればいい！」とよく言ってました。部員も多く集まり、7回（転勤時の在校生も含めると9回）の全国大会出場することができました。生徒たちには、「山は遊びなのだから楽しもう！しかし、命がけの遊びだから安全に帰って来られる体力・技術をしっかり身につけ、地図や天気その他の知識も持たなければならない。余裕のある体力を持つことで花々や自然を楽しむことができる。」と話していました。他の競技と違い、大会で勝つための部活ではないと指導してきたつもりです。しかし、生徒は出るからには勝ちたい！という意識が強いものなのでその意識を上手く導くと強いチームになりました。「本州のくそ暑い低山のインターハイより、大雪山の夏合宿の方がいいんじゃないか？」と言ってもやはり勝ちたいのですね。一度だけ「今年は絶対優勝してインターハイに行こう！」言ったことがあります。その年の全国大会は岐阜県で会場は北アルプス、槍ヶ岳に登れました。よくまとまった強いチームだったので、インターハイに進みましたが一人所恐怖症の子がいてチーム行動の槍の穂先の下山でビビってベソをかき、叱咤して下山したのが思い出されます。また、この年は監督も全装で、「荷物を背負って北アルプスを縦走できない監督は来るな！」という大会でした。インターハイではあまり良い成績は残していません。暑いのに我慢して長袖着る必要はない！夜も 30°Cのテントの中で寝袋はいらない！とまず装備で減点。しかし、全道代表として恥ずかしくない登山をしようと鍛えて行ったのでバテたり熱中症になる生徒は一人もいませんでした。

北斗高校ではOB会に大変お世話になりました。校舎改築の際、前庭整備で、古い部室が取り壊されることになりOB会で寄付を集め建築業のOBの力で立派な山小屋風の部室を建てていただきました。こんな戸建ての立派な部室を持つ山岳部は他にないのではないのでしょうか。全国大会出場の時も寄付をいただき、生徒に負担かけることなく装備をそろえ大会に出場することができました。充実した15年間の北見での勤務でした。

3校目は小樽桜陽。できるだけ山岳部の指導のできる学校を希望したのですが、山岳部はなく、なんと卓球部の顧問。各種の大会は休日に体育館でカーテンを閉め切り、狭い卓球台の上での勝負。スポー

ツとしての素晴らしさは認めますが、山と対極の競技で私には我慢できない世界でした。早速、同好会を立ち上げ生徒を集めました。生徒会規約では3年以上の同好会活動の実績がないと部に昇格できず、備品や遠征費の調達に苦労しました。

桜陽高校は小樽市街の北西部、赤岩山の麓の高台にあります。晴れた日は石狩湾の北に暑寒別岳、東に夕張・芦別岳が望め、特に視界のいいときは日高や十勝の山なみも見えることがありました。校舎の裏手はなえぼ公園につながり、遊歩道は起伏のある良いトレーニングコースでした。夏場はランニング、冬場は歩くスキーやスノーシューで生徒と一緒に汗をかきました。車で20分くらい走ると、塩谷丸山の登山口です。低山ながら積丹方面の海岸や山なみの展望が素晴らしく、羊蹄山も望めます。ここもトレーニングによく登りました。桜陽高校で退職を迎えましたが、その後も部の山行に同行させてもらったり、地区大会にも役員として携わることができました。

顧問として34年、専門委員として21年高体連登山部と関わりってきました。これまで大きな事故もなく(危ないのはありましたが……)、山を楽しめたのは、多くの人の支えがあったからだと感謝しています。一緒に顧問を務めてくださった先生方、山の仲間たち、専門部の先生方など本当にお世話になりました。そして一緒に山で遊んでくれた生徒たち、中にはOBになっても一緒に登ったり、大会を手伝ってくれたり、山でOB会を開催してくれたりありがたい気持ちでいっぱいです。あと何年、山に登り続けられるかわかりませんが体力の続く限り高校生の登山と関わっていけることを願っています。

【生徒の山行記録から～釧路湖陵・旭川北】

【北海道高体連登山専門部 OB 釧路商業高等学校 竹中 正喜】

I 釧路湖陵高等学校山岳部 山行記録 〈2012年 冬の藻琴山〉

～こちらわかん部隊です～

本来、藻琴山へはスキーをしに行くはずであったのだが、山岳部の部員の中にはスキーをしたことがない者もいて、初スキーが山スキーというのは危険であるしスキー用具の数も足りないということで、暗躍組織「わかん部隊」が一部で結成されたのであった。

わかんって何？と思っているんだろう？わかんというのは超簡単に言うと、靴に装着する金属の輪で深い雪上、つまり生身の人間では全く前へ進めないようなエリアで、高機動性能を我々に付加してくれる決戦兵器である！！とは言うが、普通に考えて、スキーで滑った方が絶対おもしろいし、かっこいいし、速い。わかんに勝ち目は無いと思われる。アイスホッケーの氷都釧路にお住まいの方ならわかりやすいと思う。これから今回の藻琴山で起こる事はスケートで滑ってる人と一緒に氷上を長靴で走ってるようなものなのだから。

いざ藻琴山。わが山岳部の偉大な先輩方のご卒業の直後であった。ある先輩は同じくスキー隊に混じり一人だけわかんを装備されたそうであるが、上記のような状況となり、「すなはち大敗す・・・」。暗躍組織「わかん部隊」には負けられない理由ができてしまった。

登山開始。幸い良い天気(晴天)。登山口の標高がもとも648mと高く、少し登っただけでオホーツク海や屈斜路湖、付近の山々(摩周岳、斜里岳等)が一望できた。空の薄い雲の影が屈斜路湖に映り、まるで仙人にでもなったかのような幻想的な光景も見ることができた。

わかん部隊は装備の恩恵を受け余裕で登り続ける。スキー部隊はスキー板をつけて登っているから、のぼりにくそうだ。それって下りですべるためにあるんだろ！っていうツッコミはなしで。この時点ではわかん部隊にアドバンテージがあるようだ。

しばらく登るとメツチャ尾根ってきた・・・。風を防ぐものがないから、我々に容赦なく風が吹き付ける。オホーツク海からやってきたやさしくてつめたい風が。これによりすーごーく寒くなってきた。どれくらい寒かったかということ、スキー用の厚い手袋をはずして5秒たった

ら手が痛くなってしまいうくらい非日常的な寒さだった。安易に手袋をはずすのは許されない・・・。幸い凍傷になったのは一人で済んだが。

注意するべきは寒さだけだったから、このような調子で山頂に到着。ここからスキー部隊はドヤ顔で下ってくんだらうなあ～と思いつつ、わかん部隊はスキーを装備した飯〇〇三先生についていって、一緒に下り始めた。暗躍組織「わかん部隊」は心に決めていたことは、イケメン下り(ダッシュで超高速下山)でスキーヤーよりもさわやかになってみせると。

雪の深さは、小学生一人分はあただろうか、かなり深かった。わかんの恩恵を受けているとはいっても、雪の質が変わったせいで先よりも走りづらくなっていた。さらに雪の中にハイマツという木のトラップがある。

暗躍組織「わかん部隊」の男達は走った。スキー場と化した戦場を。力尽きるまで走った。たとえ、小学生一人分の雪に埋まろうとも、ハイマツに引っかかって正面から倒れようとも、起き上がって・・・立ち上がって・・・

これが WAKAN を装備したとある高校生達の藻琴山であった。
2012年3月4日

～こちらスキー部隊です。～

今回は、シール(斜面を登るときにスキーが後ろに滑らないようにするためのスペシャルアイテム)をスキーに装備して登りました。登る前日に練習したロイヤルバレースキー場の傾斜よりも急だったので、登りはしんどかったです。途中にあった急な勾配を登るときに少しコツが必要で、そのコツをつかむまでかなり辛かったです。やっとの思いで頂上に着いて「ここからがスキーの真骨頂だっ！」と言いたかったところなのですが、傾斜がかなり急で、しかも「ハイマツ」トラップがところどころに点在していたため、あまり上手でない筆者はスピードがあまりだせず、ただ疲れただけでした・・・。

T先生、部長さんのお二人は華麗なスキーさばきでスイスイ滑って降りていきました。

帰りは川湯温泉に立ち寄りました。疲れた体を癒すための温泉は湯加減も丁度良く、さらに露天風呂もあったので入ってみたのですが、藻類が育ちやすい湯加減でした(笑)



写真1 わかん部隊と凍った屈斜路湖



写真4 スキーの真骨頂？



写真2 スキー部隊と樹氷



写真5 爆走するわかん部隊



写真3 山頂にて 遠くに流氷が見える

2 旭川北高等学校山岳部 山行記録 〈2018年クワウンナイ沢合宿〉

旭川北高校山岳部は9月14日から17日までの4日間、僕たちはクワウンナイ合宿に行った。ルートは、天人峡温泉～カウん沢二股付近（泊）～クワウンナイ沢源頭（泊）～天人峡温泉である。J君は家族と食事をする予定があったらしく、今回は不参加だった。合宿の始まりとなった14日は金曜日だったので、いつも通り授業を済ませ、イオンへ買い出しに行き、買い物が終わった後は、今回一緒に登ってくださった工業高校の先生と、釧路湖陵の先生と合流するため、土井商店で待ち合わせをし、全員集まってから2日目のスタート地点兼1日目の宿泊地でもある天人峡温泉の駐車場へ向かった。駐車場に着いた僕らは、テントを設営した。もうしばらく食べる事のない下界のご飯を、皆で名残惜しそうに食べた。特にすることもなかったが、去年は食材をキツネに食べられてしまったので、外を入念にチェック、次の日以降の準備もして、明日に備えて眠りに着いた。

2日目は、5時くらいに起床。朝食、準備を済ませ、およそ6時に本当の合宿がスタートした。僕は1年以上沢に行っていなかった（他の部員は7月末にオロエン沢に行っていた）ため、水がとても冷たく感じた。1時間ほど沢を歩くと、高巻きゾーンと出会った。危険なためT先生が先に行き、ザイル等の準備をしてもらってから生徒たちは登った。ここを突破した後は、しばらく平坦だが、岩肌が足にくるようなところを歩いて行った。そして午前11時半ごろ、2日目のテン場に到着した。（カウん沢との二股より30分ほど進んだ地点）手分けして、テントを張る場所の整地と、焚き火用の枯れ木集めをした。無事にテントを設営し、焚き火も始めることができた。湿った木もそこそこあったが、同じように乾燥した木も多くあったので、無事に暖まれてよかった。夕食に向けて、先生は魚釣りをした。生徒の数人は釣り体験をしていた。この日の夕食は、ここの沢で釣った魚とご飯、そして豚汁だ。豚汁の味付けは、濃い方がいいか薄い方がいいかで、E原さんと議論になり、2パターン作り、食卓に持っていくと、僕以外を除いた全員が、濃い方がいいと言っていた。疲れた体には濃い味が染みるのだろうか……。完食し、片づけもほぼほぼ済ませたので、お楽しみである花火をやった。水につかるとおしゃかになるので、遡行中は転ばないように慎重に歩いていた。焚き火が消える前に、みな静かに眠りに着いた。

そして、3日目が始まる。朝食は、前日に炊いておいたご飯だ。しかし、このご飯は冷えていたので、みんなの箸のすすみは少し遅く感じた。部員の一人が中々行動を開始しようとしなかったため、主に男子の部員は少々フラストレーションが溜まった。しかし、なんだかんだ間に合うように動いてくれたので、結果的には大体予定通りに出発することができた。この日も沢を遡行し、源頭のテン場を目的地として歩いて行った。この日はとてもよい日差しの下での遡行だったため、足元のひんやりした水と相まって、とても気持ち良かった。しばらく歩くと、去年も我々の前に立ちはだかり、M田くんが自由落下をした、急な崖にたどり着いた。上から垂れていた縄は、老朽化のために使うと非常に危険だったため、2日目の高巻きするときと同様に、竹中先生が先に登って、部員は上から投げられたザイルを身につけ、引っ張ってもらった。

今年も数人が宙ぶらりんになっていたが、最終的には全員無事に登ることができた。少々の小休止を挟みながら歩いていると、次第に水の流れは弱くなっていき、目的地に近付いているのが感じ取れた。綺麗な紅葉を横目にして登っていき、そして11時半ごろ、幕営地に到着し、これをもって今回の楽しい沢登りは終了となった。

昼食のサンドイッチをみんなで食べ、それからそれぞれ平らな場所を探してテントを張った。午前中に全行動を終え、体力的に余裕があったので、小高い山に登って紅葉を見渡したり写真を撮ったりした。ここのテン場にはWi-Fiが飛んでいる場所があったので、E原くんは一目散にそれを探しに駆け回っていた。夕食までかなりの時間があったので、おやつゼリーを作ったりもした。5時くらいになって、我々は夕食の準備を始めた。この日は棒棒鶏とチンジャオロースを食べた。棒棒鶏は、いつもの食材に加え、くずきりを先生の案で入れた。いつも以上に美味しく感じた。この日の夜は少し肌寒かったので、早めにテントに入って寒さをしのいだ。

4日目、ついにこの合宿も最終日を迎えた。朝はあまり天気が良くなかったため、雨具を着て出発した。出発して早々に、ハイマツをかき分けながら進んでいき、それが終わったと思えばゴロゴロした岩の上を歩くという、アスレチック的な登りを朝からした。霧がかかっていたので踏み跡を見失ってしまうハプニングはあったが、YAMAPという登山用のアプリ(地形図&位置情報を提供してくれる)のおかげで、なんとか遭難せずに済んだ。去年はヒサゴ沼を道中で見ることが出来たが、今年は先

述の天候状況のため残念ながら見る事が出来なかった。今回のゴール地点である、化雲岳前最後の登りの前で一度小休止をしてから、9時ごろ、山頂に到着した。山頂からの景色は、やはり霧のため、あまりよくはなかった。だが、下山し始めると、段々雲と霧が晴れていき、下山中は絶景を楽しむことができた。僕のまだ短い山行の中で、トップ3に入るくらい下山は大変だったが、下山中に見た滝や紅葉、山々は、どれも秋を感じさせてくれる素晴らしいものだった。僕にとってこの部活での長期合宿&沢登りは最後だったが、とても思い出に残るいい経験になった。



写真3 釣ったオシロコマのムニエル



写真1 下流部の徒渉



写真4 滑滝（滝ノ瀬十三丁）



写真2 函の高捲き



写真5 源頭の幕営地

【胆振・上川・十勝での23年】

【北海道高体連登山専門部 OB 川名 典道】

知人から「登山とは何か?」と問われ、即答できずに少し調べても満足がいかず、便利な Ai に聞いても腑に落ちてはいない。どうも登山の確固たる定義は無いようですね。

私の登山は、1992(平成4)年室蘭栄の山岳部顧問から始まりました。それ以前の藻岩山、函館山、アポイ岳は、ハイキングだったかもしれません。部員の背を追って登った鷲別・徳舜瞥・アポイ・恵庭・余市・無意根・大雪山等々は、計画して山頂を目指し無事に下山・帰宅する登山の始まりでした。靴、雨具、ザック、水、ライト、食料等々にはじまり、春先の雪上滑落訓練、テント泊、夏の沢登り等々、全ては山本貴司先生からの伝授でした。登山に審査があることだけでなく、初めての全道大会では、胆振地区と全道との審査方法の違いに驚きました。当時胆振地区で蓑口先生、山納先生、畑野先生、そして帯広で一緒になる内海先生とも出会いました。

1997(平成9)年旭川東に転勤し、水野憲雄先生、林宏司先生と、日高と渡島半島の山までは行けませんでした。多くの山を登りました。水野先生とのテント泊数は三桁をはるかに超え、書き尽くせないほどの思い出ばかりです。写真のように部員が多くいて、複数パーティの年もあれば、ひとつも組めない年もありました。大会



のための人選は極めて難しく、全道と全国大会の審査方法の違いにも翻弄されました。どの登山も生徒と一緒に、私が教えられることばかりでした。まるで日々の仕事の辛さから逃れるように登っていたようにも思えます。

上川地区での15年間では人とも山とも多くの出会いがあり、両先生が退職してからは、相田敬史先生と多くの山を登り、どの山も忘れられません。



2012(平成24)年帯広柏葉に転勤し、現在新潟県在住の二瓶先生や内海先生とも再会し、ニペソツ、ウペサンケでの全道大会開催や帯広柏葉の男女アベック優勝で神奈川大会に出たことも思い出に残ります。



卒業生たちとの関係は今も続いています。また、十勝岳連峰縦走を何度も一緒にした菅野先生との再会も忘れられません。

2015(平成27)年士別翔雲への転勤とともに顧問としてはできなくなりましたが、地区大会等では役員として何度かお手伝いができました。

退職後の2020(令和2)年からは飯田一三先生率いる旭川東の部活動指導員として、'22(令和4)年香川県、'23(令和5)年北海道と通算9回の全国大会にも関わら

せてもらい、’24(令和6)年全国大会男子優勝、女子準優勝の偉業に少しでも繋がっていたら幸いです。

胆振、上川、十勝地区で、3校23年間高校山岳部の顧問として多くの山に登り、多くの方と出会いましたが、書き残せる思い出には限りがあります。以下に、2009(平成21)から強豪北見北斗と競り合い全道女子3連覇で兵庫、鹿児島・宮崎、青森の全国大会に参加した旭川東山岳部OGに、生徒から見た山岳部について書いてもらいます。

【先生と仲間と、山に学んだ3年間】

旭川東高等学校山岳部OG 齊藤風香

私が山と出会ったのは中学2年生の夏でした。祖父から「一度は大雪山に登ったほうがいいぞ」と勧められ、大雪青少年交流の家が主催する中高生対象のサマーキャンプに参加したことがすべての始まりです。(K2を無酸素で登頂した登山家・戸高雅史さんと5泊6日で大雪トムラウシ山系を縦走するという・・・今振り返るとすごく攻めのあるぜいたくな企画でした)広大な山並みを前に感じた胸の高鳴りは今でも鮮明で、その体験をきっかけに「高校では絶対に山岳部に入ろう」と心に決めました。

「東高に入学して山岳部に入る」という思いだけで必死に勉強し、合格通知を手にしたときの喜びは言葉にできません。入部すると、それぞれに個性が光る2人の同期に出会いました。価値観も性格もまったく違うのに、不思議と息が合い、その後3年間の山行を共に乗り越えたかけがえのない仲間になりました。今も一生の友人として深い縁が続いています。そして、指導してくださった顧問の先生方もまた個性派ぞろいでしたが、週末になると、泊まりがけて山に連れ出してくれて、山が持つあらゆる表情を私たちにを見せてくれました。

3年間の活動の中でも、忘れられない山がトムラウシ山です。夏合宿で訪れた際、連なる壮大な大雪山の稜線、静けさを破るように広がる朝焼けの光、そして太陽が背中をじんわりと温めてくれるあの瞬間——そのすべてが、高校生生の私に「うわあ、なんか、生きている!」としみじみ感じさせる不思議な実感を与えてくれました。あの景色は今でも心に焼きついており、いつか必ずもう一度見たいと思っています。

恵まれたことに、3年連続でインターハイに出場することもできました。当時は私たち同期3人が入部し、ようやく女子隊が組めるようになったばかり。3年生の先輩1人と私たち1年生が3人という、経験も知識も浅いチームでしたが、それでも全国大会の舞台までなんとかたどり着くことができました。2年目からは、全道大会での連覇を求められるプレッシャーもありましたが、何よりも価値があったのは、山岳部のみんなと一緒に山に向き合った日々そのものです。厳しい天候や苦しいトレーニングもありましたが、乗り越えた一つひとつが私を成長させてくれました。そんな東高山岳部は、令和6年度インターハイで男子優勝、女子準優勝という優秀な成績を収めました。偉業を成し遂げた後輩たちを誇らしく思います。

高校を卒業した現在、私は大雪山のふもとの町に移住し、社会人9年目を迎えています。休日には家族や職場の同僚と山に出かけ、山登りは今でも大切な趣味として生活の一部にあります。長い間心惹かれてきた大雪山を日常の景色として眺められる環境で暮らせていることに、どこか運命のようなものを感じています。

山岳部で過ごした3年間は、私の価値観や人生の選択に深く影響しています。自然の中で感じた畏怖と喜び、仲間との絆、努力を積み重ねることの意味、それらすべてが今の私を形づくっています。山とともに過ごした日々、そこで出会った人々、感動した景色に心から感謝しながら、これからも山登りを大切に続けていきたいと思っています。

最後に、このような記念の誌面に原稿を寄せる機会をいただきましたこと、深く感謝申し上げます。



2012年8月 夏合宿トムラウシ山頂にて

【山岳部の影響力】

旭川東高校山岳部 OG 山越織江

今現在、山岳部に所属されているみなさんにとって、山岳部はどのような部活でしょうか？

私が高校生の当時は、まだ若者の登山ブームはなく、旭川東高校としては、大会で好成績を納めていたにもかかわらず、存在を認知していない学生もいたほどのマイナーな部活でした。当時使っていた秀岳荘の真っ赤なメインザックを背負いながら校内を歩いていると、他の学生から奇異の眼差しを向けられたことが今でも記憶に残っています。

私自身も「なんとなく面白そうだから」という理由で入部を決めました。その後の人生を左右させるような、たくさんの経験をさせて頂きました。そのうち、特に印象深く覚えていることをいくつか上げていこうと思います。まずはじめに、山では生死を伴うような危険が隣り合わせであるということ。具体的には、白雲岳ですさまじい強風に吹かれ、転んで動けなくなったメンバーが出ていながら、先を進んでいる部員が気づかず、隊がバラバラになってしまいそうになり、恐怖だったこと（その当時トムラウシ山で登山者8名が夏山で低体温症で亡くなる事故が発生したこともあり、不安が頭を過った）。沢下り時に私自身が溺れてしまったこと。美瑛岳を下山中、当時顧問を務めていた川名先生が首から下は全て雪にすっぽりと埋まってしまったこと etc…



次に、登山中以外の時間の過ごし方。みんなでご飯を作り、テントの中で就寝し、早朝から登山。帰りは顧問の先生の車の中で必死に睡魔と戦う時間。全国大会の前日日程も初めて訪れる場所の空気や風土、食に触れ、メンバーとたくさん笑って、厳しい大会に備えていたのを

覚えています。

最後に、登山で見られる絶景。一番印象に残っているのは、トムラウシ山で山中泊をして、ご来光を拝んだあの景色。赤やオレンジ、ピンクのグラデーションに包ま



れながら、山頂から見た眺めは忘れられません。

山岳部に入ったことで、他の部活ではなかなかできないであろうたくさんの経験、そして、かけがえのない時間を過ごさせて頂きました。今になって振り返ると、その当時、平日は勤務をしながら、シーズン中はほぼ毎週末登山をし、生徒たちの安全を確保して下さっていた顧問の先生方は本当にすごかったのだと感じます。私は高校卒業後、進学のため上京し、今は鹿児島県の離島である奄美大島に住んでいます。奄美に移住するきっかけになったのも登山をしていたことが関わっています。

このように、私にとって高校時代の山岳部での経験が人生に与える影響は凄まじく、もしかすると、今、部活に励んでいる皆さんにとっても、人生のターニングポイントの一つとなるかもしれません。登山を通してたくさんのことを感じながら、安全に、そして、存分に山行を楽しんでください。



2012年5月 十勝岳避難小屋前

【山人生のはじまり】

旭川東高校山岳部 OG 山崎 和可奈

私の山人生は、高校山岳部から始まりました。中学までは吹奏楽部に入っていたのですが、高校受験を期に、何か新しいことに挑戦してみたいという意欲が湧き、山岳部に興味を持ちました。

毎週末大きな荷物を持って登校し、行ったことのない山へ行く。普段遠出をあまりしてこなかったのが、長い移動というだけでも旅行感覚なところもあり、登山と温泉、地方のご飯屋さんに寄ることがセットなところも含めて全てがわくわく刺激的で、どんどん山岳部の活動にのめり込んでいきました。



インターハイに出場したりと、印象深い話はたくさんありますが、それはまたの機会にして、話は一気に飛びます。

高校を卒業し、大学生を経て、就職活動をしようという時に、生涯関わっていたいものって何かと考えて、いちばんに思い浮かんだのが登山でした。登山用品メーカーに就職し、店頭で立ちいろんなことを経験させていただきました。そこで、素敵な出会いもあり、結婚もしました。

仕事で登山に関わるようになり、夫と山に行くようになり、山歩きの幅はどんどん広がりました。テント泊縦走、沢登り、雪山、トレイルランニングのようなことを

してみたり、ロングトレイルという歩き方を教えてもらい、いろいろ調べてみたりもしました。

登山用品メーカーで勤めていて、毎日山の話をして働くのはとても充実していました。ただ、今の休みの取り方で、あとどのくらい行きたいところにいけるだろうか。体力のあるうちに、どれだけ冒険ができるのだろうかと考えた時に、会社で働き続けることよりも、やりたいことをやってみよう！という気持ちが強く湧いてきたのです。

そうして、意を決して夫婦揃って会社を退職し、伊豆半島に移住して来たのが5年ほど前のことです。なんで伊豆半島なのか。もう何度となく聞かれましたが、伊豆半島というコンパクトなエリアの中に、海があり、山があり、川があり、富士山が見える。温泉がいたるところにあり、ご飯は海のものも山のものもうまい。1年中気軽に遊びに出かけられる温暖な気候。この最高の条件が決め手です。

伊豆半島に初めて遊びに来た時に、山岳部で毎週山に出かけていた時のことを、急に思い出しました。日帰りで山に登り、温泉に入り、美味しいものを食べる。時々、遠出をしたり、山中で泊まり、自然の中でゆっくり過ごす。山とのこの距離感がとても心地良かったなあと思いついて、伊豆半島が急に自分たちの理想に近く感じたのです。

そして今、自分たちで山道具のお店をやりながら、時には海外で1か月間ロングトレイルを歩いたり、日本アルプスな山々を繋いで日本海から太平洋まで横断してみたりしています。東校山岳部に入部を決めた時の私には全く想像もつかなかった最高の山人生を歩んでいます！

もう一回高校生からやり直すとしても、また山岳部に入るだろうと思えるくらい東校山岳部での日々は私の人生に欠かせない時間でした。



【登山専門部に関わらせていただいた36年】

【北海道旭川工業高等学校 教諭 内海 健一】

1 いろいろな先生方にお世話になりました

大学時代に山をかじり、初任校で野球部と山岳部の顧問選択を迫られ山岳部を希望してから、1年間の硬式テニス部顧問を挟んで、36年間山岳部に関わらせていただきました。元々、野球をやっていたためか、持久力よりも瞬発力系の運動能力で、若いときから、山の中で諸先輩方に後れを取り、迷惑をかけてきました。また、現在高校登山で要求されているような気象、地形、救急等の知識もいい加減で、毎回毎回先輩の先生や選手諸君から教わり、吸収し、の年月だったと思います。

最後の最後まで、迷惑のかけっぱなしで退職することになりますが、後続の先生方の新しい感性と時代に即した考え方で、どの時代も年齢が変わらない山に興味のある高校生を、見守り、育て、笑顔にさせてほしいと願っています。



2 登山専門部卒業としてのIH

北海道IHが近づくにつれ、顧問の先生方の年齢構成などを見るにつれ、これは専門部への恩返しとしてIHに関わらなければならないなという気持ちで専門委員

や専門委員長をさせていただきました。2023年のIHでは、登山隊長としての甘さ、曖昧さを随所に感じ、協力していただいた各役員の先生方にご不安やご迷惑をたくさんおかけしたと反省しました。それでも、たくさんの役員の方々のお力添えのおかげで、なんとかIHも完了することができ、少しでも恩返しになれていたらよいなという気持ちで業務を終了しました。

3 これからの山岳部活動

定年延長を受けて、しつこく山岳部顧問をさせていただいていますが、山岳部で活動したいと望む生徒の多様さ、その活動を保証するための安全体制の構築、新しい顧問の先生の確保など問題は山積んでいます。学校という現場は、悪い言い方をすれば「事なかれ」主義で、野外での想定できないリスクをはらむ山岳部の存在は管理する立場の先生方からは「目の上のたんこぶ」のように扱われていると感じ続けています。顧問が若い先生だと特に、プレッシャーをかけてきたり、PTAからもプレッシャーをかけられたりと、部活動の顧問の立場が不安定な今の体制の中では、なかなか山岳部顧問になってくれる先生方が少ないのではないかと感じています。それでも、「自然の中で登山や野外体験をしたい」という希望を持った生徒に「一緒に」体験させてあげられるそんな部活動の火は消してほしくないと感じています。部活動の民間委託などの話題が出て久しいですが、うまくいっている話は聞きません。各地元に山岳部はありますが、「自然に入る」ための基礎基本に関わる部分を山岳部は担っているのではないかと感じています。登山の基礎知識、幕営の技術、救急法、気象、地形などなどの基礎を学ぶ場をこれからも続けていってほしいと思っています。

4 結びに

長い間、高校山岳部が活動していくためには、いろいろなやり方があると思います。クライミングを取り入れて、活動には場を持たせ、冬のトレーニングにしている学校も多いと思います。夏場の登山活動や野営活動を続けていくために、他の部活動では出てこない「移動」の問題、「勤務時間」の問題に対処策を考えていくのは急務

です。ぜひ、登山専門部に関わってきた先生中心に、そこから管理職になっていた先生方、少しでも関わりを持ったことのある先生方で、高校生の「やりたい」という気持ちを大事にできるよう、顧問の先生方の犠牲や我慢の上に成り立つのではないやり方を構築してもらいたいと希望しています。

山の上でのきれいな景色、ご来光、テン場でのおいしいご飯、冷たい山の水、お花畑、重い荷物、などなど、たくさんの楽しい出来事が未来永劫、高校生に提供できることを祈っています。

【 大会登山と部活登山、山、最高 】

【北海道高体連登山専門部 OG 西 千秋】

北星学園女子高校でワンダーフォーゲル部顧問を1993年より務めてきました。幼少期から学生時代まで山登りを楽しんできたものとしては願ってもいないことでした。北星女子高校にはともに学生時代より登山されてきた大御所の岡田勝英先生と山下文孝先生がいらっしゃいました。お二人の下での三番目の顧問はゆったりと多くのことを経験させていただく機会となりました。高体連に携わるにあたり最高のスタートとなり、その後三十数年が経過しました。



初めて生徒を引率し、大会に参加するときに「とにかく、生徒と一緒に歩けばいいから」と言われ、何かあったら二人の大先生が登場してくれるものだと思っていました。大会要項に記された日時、山域、コースを生徒と共有し、装備分担も昼食を含め、普段の部活での山行と変わらぬ準備をして大会に臨みました。だから、大会が始まると衝撃の連続でした。テント設営の「ヨーイ始め」、一斉に学校ごとに動き出すと驚きよりも可笑しさで笑ってしまいました。「一体、何をやる山登りかしら??」が頭から離れませんでした。翌日からの行動も自分はどこを歩けばよいのかも、生徒に勝手に接触してはいけないことも知らず、休憩ごとに最後尾の顧問隊から生徒の所に行き、調子を確認していました。当然、隊長の先生から注意を受け、大会登山と部活登山が全く違うものだということになるのです。もともと北星は高体連の大会は、年に何度か他校の生徒や先生たちと一緒に山に登り、情報交換や交流する場と考え参加してきたようでした。また、私も「そもそも登山の何を審査するのだ、する必要はあるのか?」とも思ったので、安全に楽しく山行を重ねていくことが

私たちの活動で、その一部に大会があるので順位などを気にする必要はない、と生徒に言ってきました。



部活での山行が充実してくると、歩き方や地図読み、山中での生活など次第に生徒たちがきちんとできることが多くなってきました。普段の部活動で行っている山や活動はどこの学校にも負けにくいくらい素晴らしく、自信をもって行動するように生徒に言ってきました。しかし、大会に参加しても入賞どころか、減点されることが多く生徒にとってはちょっと残念な結果が続きました。途中経過を省略しますが、少しずつ生徒・顧問ともに大会は大会と割り切って参加することになります。今も臍に落ちない基準などがありますが、大会に参加するのだから、基準には従うことを受け入れることにしました。近年は大会での審査基準や準備するための資料も明示されるので生徒・顧問ともとても取り組みやすいものになりました。専門部の先生方のご尽力に感謝します。



札幌支部大会、全道大会で隊長・副隊長を務めることが多くありました。隊の中にいるので近くで生徒たちの表情が見られ、いろいろな話しをする機会に恵まれました。普段のトレーニングや山域、合宿、食事のことなど他校の活動の様子を知り、参考にさせていただきました。先頭や中間を歩いているときは緊張でピリピリしている生徒やパーティーがいて、お互いけん制している感が強く、あまり会話は弾みませんでした。しかし、ローテーションで最後尾に来るとちょっとリラックスし、より日常の様子を話してくれ、楽しく歩いていました。また、「審査解除」の声はこの上なくうれしい言葉でした。本当の意味で山や植物、景色を堪能し、気がねなくおしゃべりができ、生徒たちの表情が一気に晴れやかになるのが印象に残っています。テント設営後に食事の準備をしているところに「審査じゃないよ。興味で聞いているの」と、テント周りしていると警戒されながらも受け入れてもらいました。学校ごとにその日の様子や食欲や体調の優れないことなども話してくれるので大切な時間でした。

どの大会においても、当番校のみなさんには本当にお世話になりました。他の競技とはかなり異なる対応を求められる中、諸先生方とお手伝い生徒たちの一所懸命な働きやすがすがしい声掛けがあり、快適に安心して大会に臨むことができました。感謝申し上げます。



山も空も、音、空気、人々もいつも素敵な体験をさせてくれています。これらの魅力をより一層楽しむために部活登山での山の知識や日常の準備、トレーニングや装備の工夫など生徒とともにしてきました。季節ごとに違う表情を見せてくれる山々には3年サイクルで計画を立てるようになりました。時期、経験、体力などを考慮した山行はその先に繋がる貴重な積み重ねでした。生徒が3年間で部活に所属している間に札幌近郊の山々は別となるべく同じ山には行かないように山行を計画していました。

全道大会は札幌から遠ければ遠いほどワクワクしました。直前登山を含めてなかなかいけない遠い山々を経験しました。開会式3日前に学校を出発し、途中にある山に登り、温泉に泊まり、洗濯や買い出しをし、テントや装備を乾かしてから開会式に臨みました。直前登山の山々は大きく、距離や標高差など生徒にとって挑むことも多くありました。大会直前にお互いの弱い面、ギリギリなところに気づき、話し合いや共有ができたチームはその後も力をつけていきました。夏と秋合宿を使って3年間で原始が原から十勝連峰から大雪山、東大雪の山々がつながるように計画しました。そしてその合間に合宿で登る山々を遠くから望むようにその周辺の山に遠征しました。近年では林道の崩壊により近寄れなくなってしまっている山々があり残念です。



「さあ、行くわよ」と、学校を出発してから同じ空間でほぼひと時も離れることなく一緒に過ごす活動は思い出の山です。テン場に向かう途中にある産直で季節の野菜を購入し、サッと茹でて夕食までのつなぎはおいしかった。どの代も起こされるのが当たり前で自分たちで起きることはなかった。早朝の誰もいない山頂は自由だった。三角点タッチの後はブロッケンに雲海そしてヤッホーも楽しんだ。休憩中のお花畑やナキウサギやオコジョなどの動物たちは安らぎとなごみくれた。雪渓の長い登りの苦しさもザック滑りと尻滑りで一気に吹き飛んだ。山菜採りやベリー摘みは時間制限を設けないといけなかった。下山後も忙しかった。温泉とソフトクリームはいつもセットで、サケの遡上、キノコ狩り、松ぼっくりなどを拾いリースの花材収集などの季節行事もあった。焚火、パッキングのやり直し、釣り、停滞、編み物まだまだある。イベントだらけの山は最高だ。

山頂到着後、生徒から「先生、紅茶が入りました」が聞けるようになるまでもう少し、ともに山々を楽しもうと思います。